

卒業論文

ラテンアメリカにおける先住民と国家の関係

欧米第二課程スペイン語専攻

学籍番号 6 5 9 7 4 9 9

小川理恵

目次

はじめに	p 2
・先住民—国家関係の概観と先住民運動	p 3
1．文献と編者について	
2．論点の整理	
3．考察	
・先住民—国家関係と文化	p 6
1．文献と編者について	
2．論点の整理	
3．各章の論点	
4．考察	
終わりに	p 2 2
文献リスト	p 2 3

はじめに

私が初めて間近で見たラテンアメリカの先住民は、民族舞踊を披露して喝采を浴びる人々だった。独特の衣装を身にまとい、体に彩色をして勇壮な踊りを踊る彼らの姿は、私が心に描いていた「先住民」そのものだった。彼らを見ていると、その場だけがはるか昔にタイムスリップしたような感覚を覚えた。同じ日に私はもう一つの先住民の姿を見つけた。それは路上で物乞いをする、粗末な身なりの人々だった。一方は広場中の注目を集め、他方は誰からも見向きもされない。その生活には大きな違いがあるが、一般の社会から切り離された存在であるという点では、どちらも同じであるように思えた。

私には白人とメスティソの、メキシコ人の友人が何人かいる。彼らは「先住民の伝統文化は素晴らしい。メキシコの誇りだ」と言う。だが同時に、物乞いに寄ってくる先住民たちを邪険に追い払う。彼らの中では、先住民は伝統文化を守りつづける「歴史的」な存在か、都市の治安を悪化させる下層民でしかないようだった。同じ都市に住む自分と同等の人間として、彼らの生活の中に先住民が入ってくることはないのである。だが実際には、先住民たちも現代社会の中で生きている。先住民たちはこれまでの、そして現在の自分たちの状況をどう思っているのだろうか。改善するために活動しているのだろうか。先住民以外の人々と、どのような関わりを持っているのだろうか。

コロンブス到着以来の差別と抑圧も今だ存在する中で、先住民たちは現代をどのように生きているのか。これが私がとりあげたいテーマである。

・先住民—国家関係の概観と先住民運動

92 年はコロンブスがアメリカ大陸に到着して 500 年目にあたる。これを記念した行事が各国で行われることに反発して、先住民¹の権利の獲得・擁護を求める、いわゆる先住民運動が活発化し、89 年にはラテンアメリカ全域レベルの先住民会議である大陸大会が開催された。また、92 年にはグアテマラの先住民運動の指導者、リゴベルタ・メンチュウ氏がノーベル平和賞を受賞、93 年は国連によって「世界の先住民のための国際年(the Year of Indigenous Peoples)」に指定され、続く 10 年が先住民のための 10 年とされるなど、国際的にも先住民に対する注目が高まっている。そこで私は、現代の先住民の活動のなかでも、先住民運動のことを扱ってみたいと考えた。

1. 文献と編者について

先住民運動を考えるにあたって、私がまず手に取ったのは “ *Indigenous peoples and democracy in Latin America* ” (NY St. Martin's Press, 1994) である。単に、差別する人々と差別される先住民という人種差別の問題ではなく、先住民を政治的アクターと捉え、先

¹ 本論文では、特に注釈のない限り「先住民」は、ラテンアメリカにコロンブス到着以前から居住していた人々とその子孫を示す

住民運動を見ていきたいと考えていた私は、先住民と国家双方の立場から先住民問題を考えた本書を選んだ。

この本は Inter-American Dialogue(IAD , 米州討論会)という組織が 1993 年に開いた、先住民問題を扱った会議の出席者によって書かれた論文をまとめた論文集である。編者である Donna Lee Van Cott は、IAD の、民族問題とアメリカ大陸における民主主義の強化に関するプロジェクトの指導者である。彼女は 1992 年から準会員として IAD に参加している。彼女はまた、アメリカ合衆国政府や世界銀行のアドバイザーも勤めている。

本書の構成は、以下の通りである。

序文(Van Cott)

- 1.先住民と民主主義：政策作成者のための論点(Van Cott)
- 2.地球規模で動く：ラテンアメリカにおける先住民の権利と国際政治(Alison Brysk)
アンデス地方
- 3.カタリスモ主義者から MNR 主義者へ？アイマラ族と新自由主義との驚くべき勇気ある連立(Xavier Albó)
- 4.コロンビアにおける先住民運動(Jesús Avirama and Rayda Márquez)
- 5.ペルーにおける先住民人口と民主主義の構築(María Isabel Remy)
- 6.文化の政策：エクアドルにおける先住民と国家(Melina H. Selverston)
メソアメリカ
- 7.グアテマラ・マヤ族の政治的立場に関する報告(Richard N.Adams)
- 8.メキシコ：先住民と国民国家(Julio C. Tresierra)
南の三角地帯
- 9.ブラジルと同地の先住民について(Carlos Frederico Marés de Souza, Jr.)
- 10.パラグアイにおける先住民(Esther Prieto)

2．論点の整理

本書の目的は、先住民と国家がお互いにどのような影響を与えたか、特にその関係がその国の民主主義にどのような影響を与えたか、という点を明らかにすることである。Van Cott は、1 章でこれらの問題は以下の 2 つの観点から考えることができると述べている。

ラテンアメリカ各国政府の立場：民族紛争(先住民運動)は民主化の過程にある社会に不安を与え、国内外からの圧力に耐えつつ政権を担っている文民政府の立場を不安定にする

先住民組織の立場：参政権を、これまで排斥されていた人々—少数民族や人数的には多い弱者(=先住民)—にも与えることこそが真の民主化であり、民主化しつつある国を不安定にしているのは、政治への参加を求めている人々ではなく、その人々を排斥している国家であり、国民国家の定義である。

先住民問題を考える時、この 2 つの観点があることを忘れてはいけないと Van Cott は言

う。

Van Cott によれば、先住民運動に対する基本的な姿勢として、政府側は国家への統合を、先住民側は多文化主義の実践を求めている。統合と多文化主義のどちらが真に民主化を促進するのか。これがこの本の主要な論点となる問いである。

3. 考察

この本は、ラテンアメリカ全体に共通する先住民と国家との関係性を紹介した2つの導入論文に、各国の運動を専門的に研究、または運動に関係している各筆者による、国ごとの状況をまとめた論文が続く構成になっている。これは、先住民と国家との関係を明らかにするという点では非常に効果的であったといえるだろう。編者による導入論文である1章で、スペイン人の到着から始まる支配者による先住民の抑圧の時代から、政府による先住民の国家への同化政策を経て、70年代に始まる先住民運動が、軍政や独裁政権からの弾圧を受けながらも大きな運動となるまでの過程が説明されている。さらに Alison Brysk による2章では、先住民運動の広がり大きな役割を果たした国際的なネットワークについて詳しく述べられている。そのあとに展開される各論文も、先住民運動の過程を、運動に対する国家の反応と共に概ね良くまとめてある。Van Cott が「本書は先住民と国家との関係に関する研究の導入になることを願って編纂された」と述べているように、研究にあたって知識を深めるためには良い入門書であるといえるだろう。

では、Van Cott が提起した「統合か多文化主義か」という問いに対する答えはどうだろうか。この問いは、一見すぐに答えが出るように思える。というのも、先住民の権利を認めるべきだというのが現在の国際的潮流であり、ラテンアメリカ諸国も徐々に先住民の権利を認める方向に動いていることは、Van Cott も認めるところなのである。Van Cott が示した問いは、実は統合か多文化主義かという単純な二者択一ではなく、現実を支配する統合政策と、先住民が求める多文化主義とをどのように融合させていけば良いのか、という問題に行きつく。

しかし、この本の中でこの問題に対して有効な回答を示した論文は少ない。言い換えれば、ほとんどの論文が先住民の権利運動についての報告書の域を出ることなく、今後の展望について具体的な提案を示さずに、先住民運動の希望的な将来像を描くに留まっているのである。

理想主義的な結論が多い中で、ボリビアの例(3章)は興味深い。ボリビアでは、1993年 MNR(民族主義的革命運動)²と、カタリスモ³の代表的組織である MRTKL(トゥパクカタリ

² 1952年に初めて政権を握って以来、ボリビア政局に大きな影響を持ちつづけている大政党。鉱山・都市労働者を支持基盤とした民族主義的な労働者政党であったが、政権担当中に経済危機を迎え、IMF 勧告を受け入れたことで政策が穏健化した。党内分裂と軍政で影響力を失うが、82年の民政移管により再び政治の表舞台に経つようになる。(平凡社「ラテン・アメリカを知る事典」1999年増補新訂)

自由主義的革命運動)の連立政権が誕生した。MNR は 93 年の選挙の時点での政権与党である。その伝統的な立場は先住民を統合して統一する「民族主義」であり、「ボリビア人」という概念を強化することだった。これに対して MRTKL の指導者であるカルデナス(Víctor Hugo Cárdenas)は常に「異なること」の権利を主張し、「多民族国家」の提唱者だった。両者の主張はラテンアメリカにおける国家と先住民それぞれの典型的な主張であるといえるだろう。

国際世論や高まるカタリスモの影響力によって、MNR の主張は大きな支持を得にくい状況だった。これに対し MRTKL は、世論への強い影響力を持ちながら、カタリスモの組織的基盤が弱いために政治力を拡大させる事ができずにいた。利害の一致を見た両党は選挙連合を組み、選挙に大勝するとカルデナスを副大統領として連立政権を発足させたのである。連立とはいっても、閣僚として活動できる人材は MRTKL 内では限られており、実際には MNR 主導の政権であった。MNR は、「民族主義」が多様性のあるものだとは認めていたが、「団結した強い統合された国家」を目指すという基本的主張は変わらなかった。先住民の副大統領の誕生はセンセーショナルであったが、先住民の意向を政治にすぐに反映させることの難しさが分かる。

筆者の Albó はここで、多民族国家という先住民の目標を達成するための具体的な方策を示している。多民族・二重言語教育の推進と先住民共同体の強化である。多民族・二重言語教育は、前政権の時代から世界銀行の支援によって進められてきたプロジェクトであり、カルデナスがその進行に大きく関わっている。先住民共同体の強化については、既に地方自治体新法が制定されており、自治権の拡大など一定の見通しが立っている。これら実現可能な政策を基盤として、長期的な視点で多民族国家への道を歩むことを提案しているこの論文は、ボリビアの新政権への有効な提案であるといえるだろう。

二重言語教育という文化的政策を主体として先住民運動を進めるという方法は、エクアドルで一定の成果を出している(6章)。エクアドルでは、先住民の指導者達は文化的な要求(特に二重言語教育)を進めることで政治的影響力を強めていった。筆者の Selverston はこれを「文化の政策」と呼んでいる。Selverston によれば、二重言語教育をはじめとする文化的要求は、国家にとって脅威的に感じられないため受け入れられやすい。逆に民族自決権や多民族国家を求める要求は、反政府運動や共産主義と同一視され、政府に脅威を与える要求だと捉えられがちなのである。実際に、ボルハ政権(1988 - 1990)は二重言語・二重文化教育の主導権を、全国レベルの先住民の代表的組織である CONAIE に与えた。国会は反対したが、民衆の支持を得て最終的に教育省と CONAIE の間で提携が結ばれ、CONAIE は多文化教育の担い手になったのである。Selverston によれば、二重言語運動とその教育は、先住民のアイデンティティを復活させ、その後の先住民組織の成功の基盤を作った。

³ 18 世紀に反植民地闘争を目指してラ・パス包囲線を指揮したトゥパク・カタリの名に由来し、現代ボリビアのアルチプラノ(アンデス山脈中の高原)に展開した先住民族の政治的・社会的・文化的復権を目指す思想。(平凡社「ラテン・アメリカを知る事典」1999 年増補新訂)

エクアドルの先住民運動は、文化的な要求を進めていく過程で強力な組織的基盤を作りだし、現在では先住民組織は国内で最も影響力のある社会運動である。

先住民に対して、反政府運動と同一視したりゲリラ活動の主体だという認識がラテンアメリカ各国で今なお存在することは Van Cott も述べている。そのような状況の中で、比較的反対されることの少ない文化的要求を前面に出し、文化的要求を進めていく中で組織を強化し、発言力を増していくことで最終的には政治的、民族的要求を実現させていこうとする政策は有効なものであると思う。Van Cott がこの点について触れていなかったことは疑問であるが、ボリビアとエクアドルで見られたこの政策は、統合と多元主義の融合という問題に対する回答となり得るのではないだろうか。これが私が本書から得た一つの回答であった。

・先住民—国家関係と文化

Van Cott の編書の中で私が最も興味を抱いたのは、先住民運動の中でも文化的な要求を前面に出す政策であった。著者の一人である Selverston は、文化的な要求(二重言語教育の実践など)は、先祖伝来の土地の返還や共同体内での自治の要求のような政治的な要求に比べ、国家の反発や弾圧を招かないと述べている。では、文化的な要求はなぜ国家にとって受け入れやすいのだろうか。国家にとって先住民文化はどのような存在なのだろうか。そして、先住民と国家の関係の中で、文化はどのような位置付けをされているのだろうか。これが私の中で新たに湧き上がってきた疑問である。

1. 文献と編者について

先住民と国家の関係を文化的な側面から見てみたいと考え、私が選んだのは“*Nation-states and indians in Latin America*” (edited by Greg Urban and Joel Sherzer: Austin, University of Texas Press, 1992) である。編者である Urban と Sherzer は、ともにテキサス大学オースティン校で文化人類学を研究している。その他の著者も、全て大学、または研究機関の研究者である。多くが文化人類学の研究者であるが、4 章を執筆した Abercrombie は歴史学、10 章の Turino は音楽が専門分野である。

本書は、Van Cott の編書と同じく先住民と国家との関係を主軸に書かれた論文集であるが、前者が政治的な関係を見ていたのに対し、本書は文化を中心に先住民と国家の関係を考えている。

本書の構成は以下の通りである。

序文：先住民、国民国家、そして文化 (Greg Urban, Joel Sherzer)

1. 理想的な三角形：サン・blas地方のクナ文化に対する戦い 1915 年から 1925 年 (James Howe)

2. エクアドル・シュアー族の間での象徴的な反覇権(Janet Hendricks)
3. プエブラの政府：メキシコ政府に対するメヒコ人の見識(Jane H. Hill)
4. 先住民であること、ボリビア人であること：「エスニシティの」そして「民族の」アイデンティティに対する言説 (Thomas Abercrombie)
5. パウベス地域で先住民であることと先住民になること(Jean E. Jackson)
6. エスニシティの言説と文化人類学への挑戦：ニカラグアの場合 (Martin Diskin)
7. 中央アメリカにおけるエスニシティ生存のための戦略(Richard N. Adams)
8. 南米低地で先住民になること(David Maybury-Lewis)
9. ブラジルにおけるインディヘニスモとナショナリティについて(Antonio Carlos de Souza Lima)
10. ペルーにおける国家とアンデス音楽(Thomas Turino)
11. グアテマラにおける先住民のイメージ：先住民とラディーノの存在を構築する際に先住民の民族衣装が果たす役割(Carol Hendrickson)
12. 先住民と国家の言語の関係における意味論：ペルー、パラグアイ、ブラジル(Greg Urban)

2. 論点の整理

編者は序章で、先住民共同体はこれまで考えられてきたような孤立した存在ではなく、共同体同士や国内外でのつながりを持っていることを指摘し、そのつながりの影響が彼らの伝統文化の形態やその文化の維持に見られると述べている。本書は、ラテンアメリカにおける国民国家と先住民の関係という観点から、このつながりが及ぼした影響を考えるものであると編者は言う。具体的には、先住民とその慣習が孤立した存在ではなく、国民国家や国際社会の一員であるとき、文化はどのような位置付けにあるのかという問題を考えていく。

この問題を考えるにあたって、編者は序文の中で前提となる背景や、考慮に入れなければならない問題をいくつか挙げている。それらを大きく以下の五つに分け、編者の論に従ってそれらの論点を整理する。

外部との連関

文化の定義とその理解のしかた

エスニシティの概念

先住民の外部、特に国家に対する対応

国民国家の先住民に対する反応

外部との連関

筆者によれば、これまでラテンアメリカの伝統的な先住民共同体は孤立した存在だと思われてきたが、実際には共同体同志や国内外とのつながりを持っているという見解が、社

会科学、特に文化人類学の中で有力になってきた。先住民共同体と外部との連関の影響はあらゆる現象の中に見て取れるが、特に言語や儀式、神話、民族衣装など先住民固有の文化の中に見られる影響は大きく、興味深いものだと言筆者は言う。

外部の影響は、これまでほとんど外部と関わりを持たなかった先住民共同体にも見られることを、筆者は1章で取り上げられている、パナマのクナ族の例を挙げて説明している。筆者によれば、文化様式自体には変化がなくても、それらの持つ意味や役割には外部との連関が影響している場合があるのである。つまり、どのような場合であれ、外部との連関を考えずに先住民とその文化を理解することは不可能であるというのが筆者の基本的な主張である。

文化の定義とその理解のしかた

文化人類学には、文化とは過去から受け継いできたものであるという認識がある。しかし、この認識はしばしば文化に対する外部の影響や、それに付随して起こる変化する状況を見無視することにつながっていると筆者は言う。特に現在のように急速に変化が進んでいく状況では、文化人類学を用いて変化しやすい状況、特に先住民—国家関係を研究することには限界がある。この限界を超えるために、筆者は以下の2つの方法論を示している。筆者によれば、本書の論文にもこれらの方法が使われている。

- ・この研究は学際的なものである事を認識すること。文化人類学以外に言語学、政治学、経済学、民族音楽学、歴史学、その他の分野が関わってくる可能性がある。
- ・これまで使われてきた文化人類学の理論的なモデルとカテゴリーが、根本的に変わってきているということを認識すること。

筆者は Michael Taussig と本書の4章を執筆している Abercrombie の言を借りて、これらの方法論を用いた文化の定義を考えている。Taussig によれば、一見土着のものに見える習慣や言い伝えも、植民者との出会いの影響を受けている (Taussig, 1987)。また、Abercrombie は、先住民の共同体とその世界観は、国家との衝突抜きには考えられないと述べている。言い換えれば、伝統や長年の連続性という観点だけから文化を解釈しようとしても、植民地時代に強要された異文化の存在がそれを不可能にするのである。つまり、筆者は文化は他者との連関を前提にした可変的なものであると捉えている。

エスニシティの概念

文化を上記のように定義したうえで先住民文化を解釈する場合に、重要になってくるのがエスニシティの概念であると筆者は言う。エスニシティの概念は近年、文化人類学上の、階級や人種に関わる議論の中で重要性を帯びている。

筆者はまず、エスニシティの一つの定義として本書7章の Adams の論を紹介している。それは、「国家という枠組みの中に存在する下位集団で、国家はそれを集合的な利益のために利用する」というものである。Adams の定義の特徴は、エスニシティを国家との関係の

中に位置付けている点である。しかし、この定義では先住民と移民との違いが不明瞭になると筆者は言う。国家の下に位置付けられた下位集団という点では、先住民も移民も変わりがないからである。実際には、国家の存在を理解し、自らその枠組みの中に入っていった移民と、国家の存在を受け入れるか否定するかという選択権を与えられなかった先住民との間には大きな違いがある。エスニシティの特徴をより明確に説明するためには、他者との間での位置付けだけでなく、彼らが自分たちの状況をどのように捉えているのかという主観的な自己理解も考慮に入れるべきだと筆者は主張する。

そこで筆者は、Frederick Barth の研究 (Barth, 1969) をもとにした、より広義な定義を示している。それは「実質的にはより大きな社会の中に組み込まれているが、他者とは違うという意識を持った人々の集団。その文化の特徴は、同じ社会に組み込まれているほかの集団との相互作用によって他との差異が強化されるものである」というものである。この定義に従うと、ラテンアメリカの先住民は孤立した、他者との接触を持たない先住民という存在から、十分に発達した国民国家の中の、他のエスニック集団と同等のエスニック集団への変化という過程の中に位置付けることができると筆者は言う。

先住民の他者、特に国民国家に対する対応

一つの文化が異文化と接触した時の反応は、大きく 2 つに分けられると筆者は言う。同化 (文化的差異をなくそうとする行動) と異化 (差異を強調しようとする行動) である。この区別は、主に具体的な行動に対して使われるものである。しかし、具体的な行動を伴わない、意識の上での差異も存在する。客観的に見れば一つの社会集団の内部にも、文化的な差異が存在する可能性があるのである。このような差異の意識は、目に見える差異と同様に集団の差別化を図る引き金になると同時に、具体的なレベルでの異化を促進する。

具体化された行動は、異文化との接触において 2 つの役割を果たすと筆者は言う。その行動が明らかに弾圧された場合や、国家の覇権に反対する際のレトリックとして使われる場合、その行動は異化、もしくは同化の公然の旗印である。しかし、具体的な行動はまた、異化、もしくは同化を、間接的に支持または批判する働きをする場合もある。後者の働きは前者より他者の影響を受けにくいいため、支配下に置かれている弱者にとって重要であると筆者は言う。

国民国家の先住民に対する反応

前述の Barth の定義によれば、エスニシティはより一般的な文化的接触の特徴であり、国民国家はなんの役割も持っていない。しかし、Adams の定義に従えば、異なるものとの接触におけるプロセスは、世界が現在のように、国家によって領土が所有し規定されるようになってから以降の特徴である。国民国家と先住民の問題は、文化的接触という概念だけでは捉えきれないと筆者は主張する。

ここで筆者は、国民国家の定義を、15～16 世紀のヨーロッパに起源を持ち、19～20 世紀

に、市民という概念と法の支配原則の発展に伴って、現在の形へと変化した社会構造に限定して。先住民の、国家との接触の特色は、以下に挙げる国家体制の特徴と関係していると筆者は言う。

- ・ 国境線における合法的な軍事力使用の独占
- ・ 他の国に対して自治(民族自決)を主張する
- ・ 全体の一員としての市民権の発達

8章を執筆している David Maybury-Lewis によれば、このような国家体制の中に先住民を組み入れることは、彼らの土地を奪い、先住民という存在をなくして市民にすることであった。この政策の実行には、植民地時代には先住民を武力によって従属させる方法がとられていたが、植民地時代以降の国民国家は、より平和的な形で先住民を市民に同化させ、彼らの主権と彼らの土地に対する権利を国家のものにしようとしたと筆者は言う。

7章の筆者である Adams は、このような国家の対応に対して、先住民は自分達の武力が劣っていることに気付き、国家との関係で有利な位置を保つために第三者からの協力を得たことを示している。これは国家の主張する他国からの自治を否定するものだったが、この行動のおかげで先住民の訴えは世界的な世論となった。このことによって、部分的な自治を含む先住民の権利を、国家が保障する責任を負うようになることが期待されていると筆者は言う。

国民国家は、国民に対して「国民意識」- アンダーソンの言うところの「想像の共同体」に属しているという意識—を求める。つまり、国民国家は、国民全体が同一の意識を持ち、異なる要素が一つになることと、他の国から異化することで国家的アイデンティティが構成されるのだと筆者は言う。そのため、Hendrickson が第 11 章で言うように、ラテンアメリカ諸国は先住民性を常に否定してきた訳ではなく、先住民性はラテンアメリカの国家的アイデンティティを構成する上で一定の役割を果たしている。先住民性がこのような役割を果たすことになったのは、先住民は元来土地の所有者であったという点で、ラテンアメリカにおけるその他のエスニック集団とは決定的に異なる大きな存在意義を持っているためであるというのが筆者の意見である。

筆者は、国民国家が先住民性に期待する役割を内的なものと外的なものに分けている。それは、

- ・ 民俗化(国内の統一を助ける)
先住民の土着の習慣(音楽とダンスが典型的なものである)を、国家の援助のもとで国民的な「伝統文化」に変えること。
- ・ 異国情緒化(国外に対して国の特徴を特化する)
(特に観光客に対して)魅力的な(他の国との)違いを保つこと。

の 2 つである。

国家と先住民性の関係は不安定なものであると筆者は言う。国家は一方では、国民の結合の基盤は均質化と同一性であるとし、先住民性を否定しているが、国民を抑圧し、彼ら

の抵抗を引き起こしかねない均質化の危険も理解している。他方で、先住民文化の特異性は、国の特徴とするために国家にとって魅力的な存在である。しかしそれは同時に国家の主権と支配権を脅かす存在でもある。国家はこの 2 つの考え方の間で揺れ動いているのだと筆者は言う。

3．各章の論点

次に、各章の論点を整理する。

1 章 An ideological triangle: The struggle over San Blas Kuna culture, 1915-1925

written by James Howe

イデオロギーの三角形： サン・ブラス地方のクナ文化に対する戦い 1915 年から 1925 年
筆者はマサチューセッツ工科大学で文化人類学を研究している。

この章は、パナマ・サンブラス地方のクナ族に対して、パナマ政府が 1915 年から 25 年にかけて行った文化変容政策と、それに対するクナ族の反乱を扱っている。

筆者はこの紛争のイデオロギー的な側面に焦点を当てている。筆者の言うイデオロギーとは、「人が強く所有し、また感じている観念に関する文化の側面であり、文化の中でも特にイメージや信仰、自己観、他者観、そして社会観とそれに対する行動に関するもの」のことである。この定義に従ってクナ族に関する紛争を考えるということは、双方が紛争において自分自身を、また相手をどのようなイメージや考えで捉え、何が危機に瀕していると考え、どのようにそれらのイメージや考えが彼らの行動に結びついたのかを考察していくことだと筆者は言う。

クナ族のイデオロギーがパナマ国家の彼らに対する文化変容策を引き起こした。同様に、国民統合を強く願う政府の政策の特質が、それに反対するクナ族の反乱(革命)における行動を生み出したということが言えるだろうと筆者は言う。つまり、お互いのイデオロギーがお互いに対する反応を生み、それらの反応がぶつかり合ったことが紛争の原因となっているのである。

イデオロギーと行動、その結果は互いに影響しあっており、2 つの文化が調和、または反発するとき、お互いのイデオロギーと行動が複雑に作用しあうことを述べている。さらに筆者は、この 2 つの文化の接触において、第三者の存在を忘れてはいけないと言う。すべての 2 つの文化の関係は、その関係の外側にある要素によって左右されている。他者と接触する時には、しばしば別の他者がその関係に立ち入ってくるものであると筆者は主張する。

2 章 Symbolic Counterhegemony among the Ecuadorian Shuar

written by Janet Hendricks

エクアドル・シュアー族の間での象徴的な反覇権

本章で扱われているのは、エクアドルのシュアー族とその政治組織であるシュアー中央

連合（以下「連合」）である。筆者はヴァンダービルト大学で文化人類学を研究している。

筆者によれば、連合は 1964 年に組織された、南米で最も古く、また最も成功している抵抗運動組織である。イデオロギーを作り出すという現象から、エクアドル国家とシュアー族の接触を考察することが本章のテーマである。

筆者は、連合がシュアー族のスピーチに対する考え方を使って、シュアー族と白人（エクアドル人）の違いを強調することで、一つの民族としての結束を高めようとしたという。結論として、エクアドル国家とシュアー族の境界面は、国家(あるいは資本主義)が、先住民の文化に浸透した影響によってだけではなく、先住民が、自分たちの文化における意味合いで、支配的な文化の侵入という危険に対抗するために今の状況を解釈し、積極的に反応したことによって形成されたと筆者は述べている。

3章 In Neca gobierno de Puebla written by Jane H. Hill

プエブラの役所：メヒコ人のメキシコ政府に対する見識

本章で取り上げるのは、マリンチェ火山近郊のトラスカラとプエブラに住む、メヒコ語(ナワトル語)を話す人々である。筆者はアリゾナ大学で文化人類学を研究している。

本章では、彼らの日常の行動、特に彼らが、自分たちの状況に対して抱いている「見解」(penetration)や抵抗運動への試みを表す、彼らの語りを考察する。「見解」というのはウィリスが用いた用語で、一つの集団の、構造の中での自分たちがどのような位置にあるのかという理解のことである。この理解は文化的知識の一部である。(Willis, '77)ウィリスはまた、「見識」は集団としての理解であるとして、個人レベルの現象である「意識」とは区別している。筆者はこの「見識」という考え方を、マリンチェの人々の国家に対する語りに適用できるとしている。この章の目的は、マリンチェの先住民と「プエブラの役所」に代表される部門の対立に使われたこの語りの背景と意味を注意深く研究することである。

筆者は、マリンチェの人々に伝わる民話「ピージョ」の例を取り、この民話が先住民共同体の象徴的な自治を主張していると述べている。しかし、この民話は同時に彼らのメキシコの政治体制に対する見識が、ウィリスの言葉を借りれば、「限界があるもの」だということも示している。

4章 To be indian, to be Bolibian: “ethnic” and “national” discourse of identity written by Thomas Abercrombie

先住民であること、ボリビア人であること：「エスニシティの」そして「民族の」アイデンティティに対する言説

本章は、ボリビアの一つの地方文化である「クルタ文化」の個別の分析と、クルタが属するより一般化した地方文化の形への言及を行う。筆者はマイアミ大学で歴史学を研究している。

筆者によれば、先住民社会は植民地政府や国家という支配的な力との関係によって形を変えてきた。植民地文化や国家もまた、彼らが支配している人々の関係によって形作られてきた。この境界面が本章の主な研究対象である。

筆者は、クルタ(先住民共同体)が「他者」(彼らを支配している国家の事)を内在化する長い過程の中で、どのように彼らは独特の存在になっていったのかを明らかにしようとしている。筆者はまた、地方(または先住民)的な文化と都会(非先住民)的な文化の形が、一つの「植民地時代の状況」の一部として互いに関係していることを、力とアイデンティティという観点から、お互いに関心を払っていた事で起こったお互いの「実体化」という点も考慮に入れながら示そうとしている。

筆者は結論として、地方と都市とがお互いに交わる2つの論説を持っていると思われるかもしれないが、実はお互いが想像上の、自らが作り上げた対象に対して論説を持っているのであると主張し、我々は文化が様々な形で重なり合い、交わりあっている多様な存在である事を認識しなければならないと提言する。

5章 Being and beoming an indian in the Vaupés

written by Jean E. Jackson

バウベス地域で先住民であることと先住民になること

本章が扱うのは、コロンビア南東部のバウベス地域に住む先住民、トゥカノアン族である。筆者は、マサチューセッツ工科大学で文化人類学を研究している。

本章は、トゥカノアン族の自己意識が熱帯雨林に住む先住民として、またトゥカノアン族としてのものから、エスニック集団としての意識に本質的に変化していったことを示そうとしている。

筆者のエスニック集団の定義は、「実質的にはより大きな社会の中に組み込まれているが、他者とは違うという意識を持った人々の集団。その文化的な特徴は、同じ社会に組み込まれているほかの集団との相互作用によって生じたものである」というものである。序章で編者も触れている Barth の定義を元にしてている。

筆者によれば、トゥカノアン族などのアマゾン地方の先住民は、政府や教会などの非先住民からの影響に加えて、自分たち以外の先住民からも強い影響を受けている。トゥカノアン族の「先住民」としての自己意識は、これらの影響を通して非常に自覚のある、政治的なものになったと筆者は言う。この変化は、トゥカノアン族がコロンビア国家に組み込まれていった結果エスニック集団となった事に起因する。同時に、彼らは外部の人間によって、先住民である事、またはトゥカノアン族であるとはどういうことかを学んだといえろと筆者は主張する。

6章 Ethnic discourse and the challenge to anthropology: the Nicaraguan case

written by Martin Diskin

エスニシティの言説と文化人類学への挑戦：ニカラグアの場合

本章で扱うのは、ニカラグアの大西洋岸に住むコステーニョ（海岸人）と呼ばれる人々である。筆者は、マサチューセッツ工科大学で文化人類学を研究している。

コステーニョたちは、サンディニスタ政権の 11 年間に代表組織と彼らの意見を代弁するリーダーを作った。本章で扱うのは、彼らが代表者や組織を通じて語った彼ら自身についての言葉、彼らの言説である。筆者の言う言説(エスニシティの言説)とは、日常の会話や公共のスピーチの中に表れる彼らが彼ら自身に関して語る語りのことである。

彼らの言説はエスニックアイデンティティの本質と民族を定義する最も普遍的なところから始まり、コステーニョとしての文化的特性へと進化し、ミスキトゥ人の文化の詳細へとたどり着いたと筆者は言う。筆者はまた、エスニシティの言説は様々な要素から構成されていると述べている。

筆者はエスニシティの言説と文化人類学の記述との相違点に注目している。文化人類学の記述がより抽象的で個別の分析を必要とするのに対して、エスニシティの言説はそのメンバーにとってより良い状態への変化を求めている。彼らの言説が文化人類学の表現と最も違うところは、言説の中で文化表現が果たす役割が比較的小さく付属的なものだという点である。彼らの主張の根幹は、国が認めるべき彼らの権利にあると筆者は言う。彼らの主張は非常に政治的なものなのである。

筆者はまた、文化人類学と政治の関係についても言及している。筆者は Hale の例をとり (Hale, 1989)、文化人類学の活動がある程度政治的な範囲に及ぶことを肯定的に捉えている。筆者によれば、様々な事情が絡み合う、速い速度で変わっていくエスニシティの政治学の本質において、文化人類学者は文化人類学の二面性 - オブザーバーとしてと参加者として - を保つことが適当である。エスニシティの概念を考えるためには、文化人類学はこれまで単に「研究の対象」であった先住民を共に歩む仲間として捉えるべきである。文化人類学に求められているのは、これまで行ってきた洞察をもとに、先住民の権利獲得運動に実際に貢献する学問を作り出すことであると筆者は言う。

7章 Strategies of ethnic survival in Central America

written by Richard N. Adams

中央アメリカにおけるエスニシティ生存のための戦略

筆者は、テキサス大学オースティン校で文化人類学を研究している。

筆者は、ウェーバーの言葉を借りて、国家を政府を中心とした公的権力の関係だと捉え、その役割は決定を下し、そのすべての構成員の利益、福祉、生存のための統治を行うことだと定義している。また、エスニシティを「下位集団を集团的利益を生み出すために利用しようとする国家の中に組みこまれた下位集団」だと定義している。これらの定義を前提として、筆者は国家とすべてのエスニシティの間には必ず衝突があるとしている。なぜなら支配者は先住民を支配者であるラディーノの関心に順応させたがっているからである。

本章は、エスニシティの生存に関わる要因を挙げてから、国家の先住民に対する戦略と先住民の国家に対する戦略を分析するものである。

国家の先住民に対する戦略として、筆者は軍事力の統制、国家的な議題を立てること、経済の統制、国家の統合の4つを挙げている。先住民の国家に対する戦略としては、言語・領土・共同体・選ばれた儀式の統制、生物学的な繁殖と拡大、経済の拡大、第三者の派生的な力、革命と反乱、社会運動、適応の増大を挙げている。

筆者は、中央アメリカは先住民の生存のための戦略によってメソアメリカ、中央アメリカ低地、大西洋岸地域の三つに分けられるという。

8章 Becoming Indian in Lowland South America

written by David Maybury-Lewis

南米低地で先住民になること

筆者は、ハーバード大学で文化人類学を研究している。

本章はブラジル、アルゼンチン、チリの三カ国において国家が先住民に対して取った異なる対応を比較し、近年これらの国に住む先住民たちの中に生まれた、先住民としての意識を調査することが目的である。

先住民は元々彼らとヨーロッパ人を区別する共通の認識を持っていた訳ではない。彼らの先住民性は侵入者によって押しつけられたものであると筆者は言う。

筆者によれば、20世紀の初めにチリとアルゼンチンが先住民を絶滅させようとしたのに対し、ブラジルが彼らを保護し、「文明化」させる政策をとったのは、当時の国家の状態の違いによる。チリとアルゼンチンは国境がほぼ確定したばかりで、国家を団結させる段階にあったのに対し、ブラジルでは既に人口に対して十分な国土が開かれていて、国家的に国土を開こうとする政策がなかったうえに、先住民は国民の生活から遊離していた。そのため当時のブラジルでは先住民問題が焦点になっておらず、1910年の先住民の権利を認める法律ができたのだと筆者は言う。実際、半世紀後に先住民の存在が問題として取り上げられたときには、他の2カ国と同じような政策がとられた。

50年代から60年代にかけてブラジルも国内開発を進め、その中で先住民に対する虐殺もあったが、それは先住民を絶滅させようとする動きではなかった。これは、ブラジルが伝統的に先住民に対して穏健な政策を取っていたことと、ブラジルの国内開発がチリやアルゼンチンより半世紀遅く始まったことによると筆者は言う。当時既に先住民を絶滅させることは一般的な国内開発の手段とは見なされなかったのである。

ブラジルでは、カトリック教会や国内外の支援組織による支援が、圧倒的な力を持つ国家との不公平な戦いをしている先住民にチャンスを与えてくれるのだと筆者は述べている。この戦いによって、それぞれの国で分離させられた先住民グループが同じ先住民としての共通意識を持つようになったのである。

結論として筆者は、先住民文化をなくし、彼らを国家に取り入れようとしている国家を

前に、南米低地の先住民が組織化し、力をつけていくことの難しさを示している。南米低地で先住民となることは、彼らの利益を守れるだけの強さを持った全国レベルの先住民組織を作り出すという難しい過程であると筆者は言う。

9章 On Indigenism and Nationality in Brazil

written by Antonio Carlos de Souza Lima

ブラジルにおけるインディヘニスモとナショナリティについて

本章で扱うのは、20世紀初めのブラジルにおける、政府による先住民保護政策である。筆者は、リオデジャネイロ国立博物館で文化人類学を研究している。

本章の目的は、ブラジルのイデオロギーとして、インディヘニスモと国民創設の間に関係が存在したことを示すことである。ブラジルにおけるインディヘニスモとは、先住民を国民国家へ組みこむための一連の考え方(または理想)であると筆者は考えている。

筆者は、Reis (1983: 2) の言を借りて国民国家の特徴は、「民族と国家の間にある大きな概念上の違いを排除する、民族と国家の強い相互依存」にあるとしている。

直接的にインディヘニスモ政策を行ったのは、政府の機関である SPILTIN(先住民保護及び労働者の定住局、後に SPI と呼ばれる)だった。SPILTIN が取った政策は「兄弟愛に基く保護」だった。「兄弟愛に基く保護」政策の根本には、先住民は国民の一部ではなく彼らを脅かす敵であるという考え方があった。この政策の目的は、「敵対的な先住民」から「国民の労働者」へ先住民を変えていくことだった。この結果、SPI は、先住民の「エスニシティの全滅」というよりは、先住民にブラジル人としてのあり方を教え込むことに成功した。

ブラジルの例で興味深いのは、「兄弟愛に基く保護」が政府の政策として、政府の組織によって行われたことであると筆者は言う。

10章 The State and Andean Musical Production in Peru

written by Thomas Turino

ペルーにおける国家とアンデス音楽の創造

本章では、ペルー政府の政策や行動が、アンデス先住民の音楽やその他の文化活動にどのように影響したかを考察していく。筆者はイリノイ大学シャンパン - ウルバナ校で音楽学を研究している。

本章の焦点となるのはなぜそしてどのように、音楽やその他の分野でアンデスの民族が美学的、文化的な特性を保つことができたのかという点である。

社会の階層が不変的な状態では、周辺に置かれた先住民のアイデンティティやその表現は消極的な抵抗の手段として、また自己表現の手段として維持される。しかし、社会が流動的になると、支配的な文化へ適応するものが増えてくると筆者は言う。ペルーにおいては、国家が「ロマンティックなナショナリズム」によって「アンデス人性」を国家のシンボルにしたことは、先住民が抵抗する理由をなくし、またアンデス人と国家との異化のシ

ンボルをなくすことでアンデス人を国家に統合するための手段だった。しかし、アンデス文化が「国民文化」化したことは、アンデス人の劣等感を減少させ、アンデス人は自らを組織化し、政治的、経済的な主張を始めた。この過程の中で、文化、特に音楽は彼らの団結のシンボルとして非常に重要であると筆者は主張する。

11 章 Images of the Indian in Guatemala: The Role of Indigenous Dress in Indian and Ladino

written by Carlos Hendrickson

グアテマラにおける先住民のイメージ 先住民とラディーノにとって先住民の衣服が果たす役割

筆者は、マルボロ単科大学で文化人類学を研究してる。

本章の目的は、グアテマラで見られる一連の先住民のイメージを検証することである。ここで言うイメージは、地域的、全国的、そして国際的なレベルで、先住民とラディーノ⁴それぞれが創りだし、取り引きし、賛美し、非難するものである。

筆者は、ミス・ユニバースのグアテマラ代表が、ラディーノであるのに先住民の衣装を着たことを例に挙げて、ラディーノは先住民やその文化を、グアテマラを代表する、国民のアイデンティティの象徴として扱っていることを示している。彼らは先住民の精神は自分たちのものであり、彼らと自分たちは同じ歴史を持っていると考えているのである。ラディーノたちは、先住民文化を自分たちのものだと言することで国家の団結を主張し、高地の先住民たちが置かれている社会的な現実や、ラディーノとの間に存在する緊張を忘れさせようとしているのだと筆者は言う。

一方先住民は、家庭や地域の組織の中で先住民としての価値観や生活習慣を保持し、強化しようと努めている。先住民が自分たちに対して持つイメージとして、筆者はさらに家庭や小さなグループの一員として、特別な才能を持つ職人としてのイメージを挙げている。このイメージは先住民と労働者階級の掛け橋となる。このような先住民は、教育のある有能で理想的な存在と見なされているが、同時に支配者から破壊分子とみなされるという脅威を抱えている。

本章が目指すのは、先住民、非先住民がそれぞれ抱く、先住民に対する従来のイメージである。これらのイメージは、グアテマラ社会を構築するモデルとなる。筆者は、先住民と非先住民がお互いに対して持つ、一体化した、相互関係を持つ集団というイメージと、独立した、自分たちとは違う存在だというイメージの2つのイメージが、それぞれの集団で全く異なる価値を持つということを強調している。個人あるいは共同体、地方レベルでの日常活動が、グアテマラ国家における新しい、支配的な先住民のイメージを作り出すことに貢献するのである。

⁴ “ladino”という単語が表す意味は国、話者によって異なる。ここでは先住民に対して、「非先住民」を指す

12 章 The Semiotic of State-Indian Linguistic Relationship: Peru, Paraguay, and Brazil

written by Greg Urban

国家と先住民の言語における関係に見る記号論：ペルー、パラグアイ、ブラジルの場合

本章で筆者は、なぜ言語が他の文化から独立した存在となり得るのかを記号論的に説明しようとしている。この問題を明らかにするために、筆者はパラグアイ、ペルー、ブラジルにおける、先住民と国家との接触の中の、言語と文化の関係に焦点を当てている。

言語と文化の関係の違いは、先住民の言語が社会の結合の中で果たした記号的な意味の違いであると筆者は言う。この三カ国の場合、基本的な違いは先住民の言語と支配者の言語の関係が、「支配」であったか「同盟」であったかという問題である。

筆者によれば、ペルーにおける先住民と国家のような支配者と被支配者という関係では、支配者は支配体制を維持するために、被支配者は支配者に抵抗し、また支配者との関係を変えるために、お互いの差異を保とうとする。同時に、支配者は被支配者が支配に対する脅威にならないために、被支配者は支配者側に立つために、被支配者が支配者に同化することも望んでいる。この矛盾を解決したのが、文化の要素に異なった意味を与えること、特にいくつかの文化要素から支配の象徴という意味を取り除くことだったと筆者は言う。同化の象徴としてスペイン語の使用を徹底させるのに対し、言語以外の文化表現は認めることで、支配体系を確立しながら先住民のアイデンティティを維持することに成功したのである。

一方パラグアイのような同盟関係においては、互いの言語を習得することは双方に利益を与えることであり、本来の言語を捨てることを意味しなかった。そのため二重言語化が進み、次第に社会のほとんどの人間が二言語を話すようになると文化の違いが減少し、言語以外の文化は均質化されていったのだと筆者は言う。

ブラジルでは、言語におけるイデオロギーの変化があったと筆者は言う。ブラジルは独立後もポルトガル王室の血を引く君主制がひかれており、ポルトガル王室(=ヨーロッパ)の影響を強く受けていた。パラグアイ同様二言語の下で文化の融合が進んでいたブラジルの状況は、ヨーロッパ的な観点では統合に対する脅威だったのである。このため、18世紀中頃から、ブラジルは次第にポルトガル語を「共通の文化」の象徴にしようとし始めた。

筆者は、文化と言語の分離性は、2つの異なった、しかし関係のある傾向によって理解されるべきであると主張する。一つは言語を一つの文化、または民族(国民)の象徴として捉えた、文化と言語を一緒に捉える傾向であり、もう一つは言語同士の関係を、二つの文化の融合から生まれた新しい集合体の中の、社会的な結合の表れとして捉える傾向である。言語同士の関係を巧みに操作することで、言語と文化を切り離すことができると筆者は言う。

4. 考察

次に、本書が提起している「国民国家と先住民の関係において、文化はどのような位置

付けにあるのか」という問題に対して、各章がどのような答えを出しているのか、5つに大別して検討していきたいと思う。

抵抗の象徴

Howe によれば、クナ族の伝統文化である女性の衣服は、政府から「野蛮と無秩序の象徴」として弾圧された。クナ族の女性の衣服は、政府から弾圧されたことで伝統の象徴として特別な意味を持つようになった。この場合、クナ族の女性の衣装は先住民と国民国家の間で、抵抗の象徴としての意味を持っている。2章では Hendricks が、シュアー族がスピーチに対する姿勢の違いから非先住民とシュアー族の違いを強調し、抵抗のレトリックとして使ったと述べている。Hendricks によれば、シュアー族は他者との出会いを自分たちなりに解釈するだけではなく、国民国家的な考えや行動という侵入者に対して抵抗するための、反対イデオロギーを作り上げている。1章で Howe が、「クナ族のイデオロギーがパナマ国家の彼らに対する文化変容策を引き起こした。同様に、国民統合を強く願う政府の政策の特質が、それに反対するクナ族の反乱(革命)における行動を生み出したということが言えるだろう」と述べているように、これらの事象は、先住民と国民国家が接触し、双方が相手に対して反応することで、文化が抵抗の象徴という意味を持つようになることを示している。

ここでいう抵抗とは、具体的な政府への反抗だけを指すものではない。3章では Hill がマリンチェ地方のナワトル語(メヒコ語)を話す人々の「見解」を論じている。Hill によれば、彼らは自分たちを先住民ではなく農民だと捉えているが、彼らは母語であるナワトル語を「メヒコ語」と呼ぶことで彼らがメキシコの元々の住民であることを暗に主張している。また、彼らに伝わる民話「ピージョ」には、政府と対立する主人公が描かれている。経済的に首都と強く結びついており、現実には政府に抵抗することができない彼らは、メヒコ語の存在と政府と戦う民話を語り継ぐことで政府と自分たちの差異を保とうとしているといえるだろう。マリンチェの人々にとって「ピージョ」の民話は精神的な「抵抗の象徴」なのである。マリンチェの人々の「見解」は、国民国家に実際に反抗せずに国民国家との異化を保つことができることを示している。しかし Hill が「限界のある」というように、経済力で地域社会に侵入してくる国家の影響は強く、精神的に自立しつづけることは難しい。

アイデンティティの変化

先住民と国民国家の接触は、一つの表象文化に抵抗の象徴という意味を持たせるだけではなく、アイデンティティの変化も引き起こす。5章で Jackson は、トゥカノアン族がエスニック集団としての意識を持つまでの過程を示している。Jackson によれば、トゥカノアン族は国民国家や、早くから国民国家と接触を持っていた高地の先住民と接触することによって、先住民であること、トゥカノアン族であることがどういうことかを学んだという。また、Maybury-Lewis は8章で「先住民は元々彼らとヨーロッパ人を区別する共通の認識を持っていた訳ではない。彼らの先住民性は侵入者によって押しつけられたものである」

と述べている。編者が序章でも述べているように、先住民は他者と接触し、衝突することで先住民としての意識を高め、エスニック集団へと変化していったというのが Jackson や Maybury-Lewis の主張だといえるだろう。

相互作用

先住民と国家の接触は、先住民に対してと同様国家に対しても影響を及ぼす。Howe は「クナ族のイデオロギーがパナマ国家の彼らに対する文化変容策を引き起こした。同様に、国民統合を強く願う政府の政策の特質が、それに反対するクナ族の反乱(革命)における行動を生み出したということが言えるだろう」と述べ、先住民と国家は、接触によって互いに「自己」と「他者」を意識し、相互に働きかけるようになることを示唆している。この相互作用の存在は、Hendricks、Adams ら、本書の多くの筆者が認めている。しかし4章を執筆した Abercrombie は、彼らが意識する「他者」とは、彼らが作り出した想像の産物であると指摘する。

Abercrombie は、都市の人が先住民を「生ける化石」だと捉えているという。彼らが考える先住民は、コロンブス到着以前の野蛮な人々であり、カーニバルの仮装に表れるような、冥界と深いつながりを持つ宗教を信じる集団である。この場合の先住民は、現実の先住民ではなく「非先住民にとっての先住民」であると Abercrombie は言う。地方と都市とがお互いに交わる2つの論説を持っていると思われるかもしれないが、実はお互いが想像上の、自らが作り上げた対象に対して論説を持っているというのが Abercrombie の結論である。国家と先住民の関係を考えるにあたって、お互いの相手に対する認識が想像上のものであるかもしれないという指摘は、Abercrombie が「我々は文化が、様々な形で重なり合い、交わりあっている多様な存在である事を認識しなければならない」というように、多文化社会では一つの価値観が絶対的に正しいと考えることは危険であることを示していると思われる。

第三者の存在

文化と文化の接触においては、第三者の存在も重要になってくる。Howe は「すべての2つの文化の関係は、その関係の外側にある要素によって左右されている。他者と接触する時には、しばしば別の他者がその関係に立ち入ってくるものである」と述べている。クナ族とパナマ政府の関係に最も深く関わった第三者はアメリカ合衆国だった。パナマ運河の存在によってパナマ政府に大きな発言力を持っていたアメリカ合衆国の支持を得ることで、クナ族はパナマ政府と対等に交渉することを可能にしたのである。同じように、Maybury-Lewis は、ブラジルの先住民がカトリック教会や国内外の協力組織の力を借りて、ブラジル政府に対して彼らの独自性を主張していると述べている。Adams は第三者の協力を得ることを「非支配的な位置に属するエスニシティが国家に対して早急に有利な位置を占めるための唯一の手段」だという。しかし Adams は同時に、第三者の力が国家によって

利用されることがあることを指摘し、第三者の協力を得ることは、エスニシティの政治的な問題を東西対立の中に取り込み、彼ら自身の問題を隠してしまうことにつながると注意を促している。とはいえ、現代社会において、先住民と国民国家の関係は第三者抜きでは考えられないし、第三者として現れる存在も外国(特にアメリカ合衆国)だけではなく NGO、国連、他の先住民組織など多様化している。自己の利益ではなく人道的な立場から先住民と国家の関係に介入してくる国連などの支援を活用することは、先住民にとって有益なことだといえるだろう。この点については Van Cott の編書の中で Brysk が詳しく述べている。

先住民文化の「国民文化」化

先住民と国家の接触の結果として、先住民文化が国民のアイデンティティの象徴として扱われるようになることがある。Hendrickson は 11 章で、ラディーノが先住民の精神は自分たちのものであり、彼らと自分たちは同じ歴史を持っていると考えていると述べている。ラディーノたちは、先住民文化を自分たちのものだと言することで、国家の団結を主張し、高地の先住民たちが置かれている社会的な現実やラディーノとの間に存在する緊張を忘れさせようとしているのである。この点に関しては、Turino も 10 章でペルー国家がアンデス音楽を「国民的な音楽」として国内に普及させたことに触れ、「アンデス人性」を国家のシンボルにしたことは、先住民が抵抗する理由をなくし、またアンデス人と国家との異化のシンボルをなくすことでアンデス人を国家に統合するための手段だったと指摘する。しかし Turino は同時に、興味深い現象を示唆している。それは、アンデス文化が「国民文化」化したことが、アンデス人の劣等感を減少させ、アンデス人は自らを組織化し、政治的、経済的な主張を始めたという点である。先住民文化が「国民文化」化したことを、独自の文化が奪われたのではなく、固有の文化が認められたと捉え、結束を高める手段に利用することは、国家の弾圧を受けずに組織化を進めるための有効な手段であるといえるだろう。

終わりに

2冊の論文集を使ってラテンアメリカにおける先住民と国家の関係を見てきた。2冊とも編者による導入論文はあるが結論を示す論文がないという点で、本全体を貫く主張がいまいであるという欠点はあるものの、先住民と国民国家の関係、その問題点、そしてこれからの展望について有効な答えを示してくれたと思う。

Van Cott の編書からは、これまでの先住民と国家の関係の概略を知ることができ、また統合と多元主義の融合という、先住民と国家の関係の軸となる問題意識を認識することができた。さらにこの本は、文化的な政策を前面に出すことで政府の弾圧を避け、組織を強化して最終的に政治的な目的を果たすという、前述の問題意識に対する一つの答えを提示してくれた。

Urban と Sherzer の編書は、先住民と国家の関係における文化の役割をより学術的に考えたものだった。Van Cott の編書に比べてミクロな視点から書かれた論文集であるが、第三者の力を利用することや、伝統文化が国民文化化されたことで先住民同士の結束を高めるなど、国家に対して権利の獲得を求める際、どの先住民にもあてはまる有効な提言があったと思う。

Urban と Sertzer は序章の中で、「差異がただ守られるだけではなく、統合と同じように認められ、衝突や衰退なしに多様な文化が共存できる」社会が理想的だと述べている。現在の国家中心の社会ではそのような社会の実現は当分難しいだろうことも認めたうえで、編者たちはこの論文集が示す経験的な研究が、理想の社会に少しずつ近づく道しるべになることを願っている。

本書が出版されたのは 91 年であり、その後先住民と国家の関係も大きく変わっている。94 年のメキシコ・サパティスタ解放戦線の武装蜂起など暗いニュースもあったが、昨年にはエクアドルで先住民組織が政変の主力となった。ペルーでは先住民系の候補者が大統領選で善戦するなど、国民国家内の先住民の位置は少しずつではあるが改善されてきていると思う。これらのことから、これまで見てきた先住民と国家関係の問題が解決されたと短絡的に考えることはできない。私が 2 冊の論文集から導き出した回答が有効なものであるかどうかは、今後の先住民と国家の関係がどう動いていくかによって決まるだろう。

文献リスト

主要文献

"Indigenous peoples and democracy in Latin America" edited by Donna Lee Van Cott
1994, St. Martin's Press, New York

"Nation-states and indians in Latin America" edited by Greg Urban and Joel Sherzer
1991, University of Texas Press, Austin

参考文献

和文

「ラテンアメリカを知る事典」平凡社刊 1999 年新訂増補

「『エスニック』とは何か エスニシティ基本論文選」

青柳まち子編・監訳 新泉社刊 1996 年

世界人権問題叢書 17

「グアテマラ先住民の女たち」 伊従直子著 明石書店刊 1997 年

英文

"Shamans, colonialism and the wild man: a study in terror and healing"

Michael Taussig, 1987, University of Chicago Press, Chicago

Introduction to *Ethnic groups and boundaries: the social organization of cultural differences* Fredrick Barth, 1969, F. Barth(ed.), 9-38. Allen & Unwin, London

Imagined communities: reflections on the origin and spread of nationalism

Benedict Anderson, 1983, Verso Editions, London

"Learning to labor" Paul Willis, 1977, Columbia University Press, New York

Contradictory consciousness: Miskitu Indians and the Nicaraguan state in conflict and reconciliation (1860-1987).

Charles R. Hale, PhD diss., Department of Anthropology, Stanford University

The nation-states as ideology: the Brazilian case. Elisa Pereira Reis *IUPERJ: Série*

Estudos, no.18. Rio de Janeiro